

カ

トマンズ盆地には木骨煉瓦造の塔がたくさんあると知り、同じ地震国として親近感を持った。二〇〇九年に、現地の研究者とともに塔の調査をさせていただく機会を得て渡航したが、マスクをしても口の中がザラつく埃っぽさや、毎食出てくるカレーの匂いに打ちのめされ、しばらく足が遠のいてしまった。

本年四月のネパール・ゴルカ地震により我々が調査させていただいた塔も被災したため、八月に同地を再訪した。被害はカトマンズ盆地から山岳地帯まで広範囲に散在し、その傾向は把握しづらい。古い建物が壊れた、と総括されることも多いが、倒壊したRCの横の組積造が無被害であるなど、地盤の影響も含めて精査が必要である。同時に、ネパールで歴史的建造物が今後どのように扱われるか少し心配である。

カトマンズ盆地は歴史的な建造物が豊富であるため、一九七九年に世界遺産に登録されている。建物は主に焼成煉瓦の組積造で、目地にはマッドモルタルかセメントモルタルを用いる。仕上げをせずに赤い壁面をあらわしにした中層建築が狭い道の両脇に建ち、所々に大小の広場や木骨煉瓦造の塔があり、独特の魅力ある町を形成している。ただし、平屋かせいぜい二階建てを造るための構法で六〜七層の建物を狭く迷路のような道の両側に建てているため、防災上は問題が多い。このような町の脆弱性も影響して、今回の地震では山間部も含めると約九、

各 人 各 説

ネパール・ゴルカ地震と歴史的建造物

東京大学大学院工学研究系建築学専攻 准教授

藤田香織

Kaori Fujita



〇〇〇〇の方が亡くなった。

日本の文化財建造物の修理方法で、経過的補強という考え方が近年位置づけられた。一度の修理ではなく段階的に補強を行うことで、減災につなげようとするものである。一部の自治体では既存建築物の改修に適用する試みが行われており、建物を長く使い続けていくことを想定すると有用な考え方である。更に、大量の建物が被災し、経済的にも資源的にも制約がある場合にも非常に有効である。一度の修理で完成形を目指すのではなく、少しずつでも建物の性能が良くなる方向で修理を分割して行うという考え方である。

UNESCOの支援で改修されたパタン市街の五階住宅を調査させていただいた際、この考えをもとに補強方法を提案した。同建物は地震の被害は大きくなかったものの、居住者は余震を怖れて一階の入り口付近で暮らしていた。一つの棟に複数の家族が住んでいるため、部分的に解体することは容易ではないが、上層階を解体する、煉瓦壁に倒れ止めの方づえをつけるなど、少しずつでもできることがある。

被災したカトマンズ盆地の市街地には、煉瓦や木材など解体した建物の部材が丁寧に積んであった。雨ざらしで保存状態は必ずしも良くないものの、再建の目処がたったら再利用しようという考えであろう。同じ地震国として、一日も早い復興に向けてできることを考えたい。